

多治見市文化財保護センター企画展

# やきものの形 ~多治見の古代から中世~

## ●はじめに

多治見を含む美濃窯（多治見市・可児市・土岐市・瑞浪市など）は、桃山陶器に代表される織部や志野、瀬戸黒などの誕生の地として広く知られている。また、明治時代の西浦焼などの磁器製品を始め、現在でも陶磁器の主要生産地である。こうした窯業生産の流れは、桃山期から急に発生した訳ではなく、古代からの生産活動が連綿と受け継がれていたからであり、今なお、多治見が窯業地として盛んな一因ではないだろうか。本展では、多治見のやきものの礎となる古代の須恵器から順に、桃山時代が始まる前の山茶碗までを紹介し、1300年以上の長きに渡る多治見の歴史の前半を通観したい。

また、やきものの形状は時代背景や需要、生産効率などによって影響を受け、柔軟に変化してきている。特に需要の多かった碗・皿を中心に、その形状の変化の様子を読み解き、本展のテーマとしたい。

# 1. 画期的な技術がもたらされた須恵器

須恵器は、5世紀の初め頃（古墳時代中期）朝鮮半島南部（百済・伽耶）から技術がもたらされ、大阪府の陶邑窯を中心とする畿内や北九州地方などで生産が始まった。それまでの野焼きから地面を掘って作る<sup>あなかま</sup>窖窯は、1200℃前後の高温で焼成できるため、薄くて硬いやきものとなる画期的な技術であった。東海地方では5世紀前半に、愛知県の猿投窯<sup>さなげ</sup>でいち早く生産が開始された。古墳時代は、主に古墳の副葬品や祭祀具として使用され、用途は限定されていた。6世紀代の虎渓山1号古墳から出土した須恵器（高杯・蓋杯・皮袋形瓶など）は、猿投窯あるいはその周辺で焼かれた製品が持ち込まれたと思われる。美濃国では、6世紀末（古墳時代後期）に各務原市を中心とする美濃須衛窯で最初に生産が開始され、猿投窯と並ぶ東海地方の主要な生産地となった。7世紀になると、須恵器生産の技術が多治見市を含む東濃窯（可児市・多治見市・土岐市・瑞浪市）にその技術がもたらされた。

多治見市域での須恵器生産は、8世紀代の大針台1号窯（市内大針町）と北丘古窯跡群（市内北丘町内）から始まる。東濃窯の須恵器窯は10基程しかなく、この地域の需要を満たす程度の規模であったが、須恵器の技術は、灰釉陶器や山茶碗へ受け継がれており、窯業生産の原点とも言える時期である。



虎渓山1号古墳出土 杯身(左) 高杯蓋(右) 6世紀



北丘4号窯出土 碗(左) 有台杯(右) 8世紀後半



北丘35号窯出土 碗 8世紀末

# 2. 日本最古の施釉陶器 ～灰釉陶器～

灰釉陶器は、植物灰を原料とした釉薬が初めて施された平安時代のやきもので、当初仏具類や金属器の代用品として作られていた。平安時代になると中国宋時代の青磁や白磁が輸入されるようになり、その模倣品として貴族層で使用された高級なやきものであった。多治見市域では9世紀後半に生産が始まりその一大生産地となった。灰釉陶器は、須恵器と比べると高火度で焼成することで焼き締まり、実用性に富んだ質の良いやきものとなる。そして、燃料や原料の土が豊富な地域であること、東山道を通じて消費地の信濃（長野県）や上野（群馬県）などの関東地域に近いことなどから量産され、東日本を中心に日本各地に流通した。



北丘14号窯出土 碗

（東濃窯の編年を、碗の形状と作りを主体に見ていく。） 参考文献：山内伸浩 2008

## 光ヶ丘1号窯式（9世紀後半）

形状：内面底部は広く扁平。口縁端を小さく外反させるものと、口縁部をひねり返して細めの玉縁状にしているものがある。外面腰部から口縁部までヘラ削り調整で、薄作り。外面底部の回転糸切り痕を回転ヘラ削りナデ調整で消し、非常に丁寧な作り。

高台：高めの付高台で、端を面取りして「く」の字状の三日月高台。

釉薬：内外面の胴部から口縁端まで幅広く刷毛掛けで、内面底部にも刷毛掛けがある場合もある。



大原2号窯出土 碗

## 大原2号窯式（10世紀前半）

形状：口径の割に器高が低く浅碗という感じで、光ヶ丘1号窯式に比べ、やや小型化する。内面底部は丸みを帯びて広い。口縁の玉縁がなくなるが、少し外反させたものもある。外面腰部から口縁部にかけてヘラ削り調整。外面底部は回転ヘラ削りナデ調整。

高台：三日月高台が残るが、大部分は外に開く裾張り形。

釉薬：内外面の口縁端から胴部まで刷毛掛けから浸け掛けへ。



虎渓山1号窯出土 碗

## 虎渓山1号窯式（10世紀後半）

形状：大原2号窯式に似ているが、口径の割に器高が高く深碗という感じ。口縁端は丸く整えている。

外面腰部から胴部にかけてヘラ削り調整。外面底部は回転ヘラ削りナデ調整。

高台：垂直で高い付高台。

釉薬：内外面の口縁端部から胴部まで浸け掛け。



明和13号窯出土 碗

## 丸石2号窯式（10世紀末～11世紀初頭）

形状：口径の割には器高が高く、虎渓山1号窯式より小型化する。口縁は少し端反り。

外面のヘラ削りなくなるため、底部から高台脇にかけて分厚い。

高台：やや高く裾張り形。高台の貼付けが徐々に雑になってくる。

釉薬：内外面の口縁部に浸け掛け。



明和 27 号窯出土 碗

#### 明和 27 号窯式 (11 世紀中頃)

形状：胴部に緩やかな張りをもち、口縁端は丸く調整されやや外反する。ヘラ削りがなくなり、底部から高台脇にかけて分厚い。雑な作りになる。

高台：断面三角高台

釉薬：内外面の口縁端部から胴部まで浸け掛け。



赤坂 1 号窯出土 碗

#### 西坂 1 号窯式 (11 世紀後半代)

形状：口径はやや大きくなるが、明和 27 号窯式よりさらに小型化する。内面底部は扁平。胴部にやや張りをもち、口縁は外反させている。玉縁碗が登場する。

高台：高台径は比較的大きいが、明和 27 号窯式より低くなる。断面三角形。

釉薬：自然釉が厚く掛かるようになり、施釉をしたのか分からないくらい薄い浸け掛け。無釉のものもある。

始めの頃は中国陶磁の模倣として丁寧な作りをし、釉薬も刷毛掛けで施していた。しかし、11 世紀に入ると大量に輸入される中国陶磁に押され、貴族・社寺・富裕農民層の灰釉陶器離れが進んだ。そのため灰釉陶器の工人たちは、武士や農民層に供給先を求めるようになり、生産量の増加と共に高級食器としての灰釉陶器の形は徐々に失われていく。そして、器種も一部の仏具を除いて、生産の主体を碗・皿に限定していく。これが、山茶碗のはじまりである。

### 3. 大量生産の山茶碗

中世陶器の代表と言える<sup>やまぢやわん</sup>山茶碗は、12 世紀から 15 世紀（平安時代末期～室町時代）にかけて、東海地方で作られた無釉の碗・皿を主体にした<sup>もみから</sup>やきもので、高台に<sup>もみから</sup>粗穀痕があるのが特徴である。また、山に入っていくと釉薬の掛かっていない粗末な茶碗が、大量に散乱していたことから「山茶碗」と呼ばれるようになったとも言われる。古代には、灰釉陶器が特産品として全国に流通したが、需要が農民層まで広がった日常食器の山茶碗は、大量生産され地元で消費される傾向にあった。

東海地方で生産された山茶碗の特徴として、土のキメが粗く、石粒が混じっている胎土で厚手の尾張型山茶碗（猿投窯・瀬戸窯・藤岡窯・知多窯を中心）と、キメの細かく緻密な胎土で薄手の東濃型山茶碗（東濃窯と瀬戸窯の一部）がある。東濃型山茶碗は、その精緻な作りから東山道を通じて広域にまで流通が及んだ。

(東濃地方の編年は 12 段階あるが、大きく (1) 期～(5) 期に分けて碗を主体に見ていく。)

参考文献：山内伸浩 2008



大藪迫間洞 4 号窯出土 碗・皿

#### (1) 矢戸上野 2 号窯式 (12 世紀前半代)

##### 谷迫間 2 号窯式 (12 世紀中頃)

形状：灰釉陶器の形状は残る。外面のロクロ目ははっきり残るが、内面は精製で底部は広い。口縁は、かろく外反。分厚い作り。やや粗めの胎土。

高台：付高台で端が尖るものが多く、粗穀痕が付くようになる。貼付け技術は粗雑で、接着部分の外れそうなものもある。

外面底部は、高台を張付ける際に内側を指圧しているが、中央部は回転糸切り痕が残っているものが多い。



北小木大上 2 号窯出土 碗・皿

#### (2) 浅間窯下 1 号窯式 (12 世紀後半代)

##### 丸石 3 号窯式 (12 世紀末～13 世紀初頭)

##### 窯洞 1 号窯式 (13 世紀前半代)

形状：口縁端は面取りし、古いタイプの内面底部は狭く中央部に凸があり、新しいタイプになるほど扁平になっていく。

内面底部に指圧痕があるものは、外面底部に板目状の圧痕が残り、糸切り痕も消していない。

高台：付高台は、断面三角形あるいは台形をなし、徐々に低くなっていく。



明和 1 号窯出土 碗・皿

#### (3) 白土原 1 号窯式 (13 世紀中頃)

##### 明和 1 号窯式 (13 世紀後半代～14 世紀初頭)

##### 大畑大洞 4 号窯式 (14 世紀初頭～中頃)

形状：外面のロクロ目が目立つが、内面は精製。口縁は外反し、端を小さく玉縁状に整えているものと、面取りしているものがある。内面底部中央に指圧痕が残り、腰部からの立ち上がり之急になる。作りは、新しくなるほど薄く、器高も低くなる

高台：糸切り底により土を貼付した付高台。



大畑大洞3号窯出土 碗・皿

(4) 大谷洞14号窯式 (14世紀後半)

大洞東1号窯式 (15世紀前半代)

形状：極端に口径および器高が小さくなり、薄作り。口縁端は丸く調整したものと、面取りしたものがある。  
高台：糸切り底に細いより土を貼付した付高台。



東町1号窯出土 碗・皿

(5) 脇之島3号窯式 (15世紀中頃)

生田2号窯式 (15世紀後半代)

形状：器高はさらに小さくなり、薄作り。内外面のロクロ目が目立つ。口縁は、内側にかえりが付くようになる。  
高台：高台がなくなり皿化する。糸切り底のまま。

当初、灰釉陶器の流れを汲んだ形状で、皿にも高台が付いており、手間を要する作りであった。(3)期の13世紀の半ばを過ぎると、多治見の山茶碗生産はピークを迎える。生産効率を上げるため、薄く小さくなっていき、ロクロ目が目立つなど作りが雑になっていく。そして最終的には、高台を付けることさえ止めてしまう。

### ○中世の施釉陶器生産

多治見市域で、無釉の山茶碗が盛んに焼かれていた頃、隣の瀬戸窯では中世唯一の施釉陶器「古瀬戸」が焼成されていた。ただし、東濃窯でも一時期山茶碗と共に灰釉を施した四耳壺・三耳壺・水注などが焼成されていた。古瀬戸の影響を受けた「瀬戸系」、美濃独自の技法が見られる「美濃系」、美濃須衛窯の影響を受けた「美濃須衛系」といった施釉陶器が13世紀代に生産されており、複雑な様相を呈していた。

瀬戸系・・・北小木大上8号窯 (四耳壺、瓶子)

美濃系・・・長瀬町赤根曾窯 (印花文の四耳壺、「大一」「大二」を押印した四耳壺、瓶子、水注)

美濃須衛系・・・北小木浜井場3号窯 (四耳壺、三耳壺、水注)

大藪迫間洞2号窯 (四耳壺、水注、瓶子など)



北小木大上8号窯出土 小型灰釉三耳壺 13世紀前半



小名田西山窯採集 水注 13世紀



北小木浜井場3号窯出土 水注(左)四耳壺(右) 13世紀後半

### ●おわりに

多治見市で古代から中世にかけて生産されたやきものは、桃山陶器のような色の美しさや形の面白さは少ない。しかし、大量生産に伴った成形方法の簡略化は、当時の生産現場の様子を浮き彫りにしているようで興味深い。また高級食器として使用されていたのが、需要の変化に対応しながら武士や農民層まで広く行き渡り、日々の生活に即した素朴で実的なやきものとなっていった。技法や材料、形は、時代と共に様々な変化を遂げて、現在の多治見市のやきもの生産に受け継がれている。そういった面を思うと、古代からの縁を感じずにはいられない。

(編集 黒田祐規子)

### 主要参考文献

多治見市 1980 『多治見市史』通史編(上)  
 可見市 2005 『可見市史』第一巻 考古・文化財  
 田口昭二 1983 考古学ライブラリー『@美濃焼』ニュー・サイエンス社  
 藤澤良祐 2008 『中世瀬戸窯の研究』  
 井上喜久男・森孝一 2010 『古陶の譜 中世のやきもの 一六古窯とその周辺』  
 愛知県史編さん委員会 2007 『愛知県史』別編 窯業2 中世・近世 瀬戸系  
 名古屋博物館 2013 『尾張のやきもの』【古代・中世】  
 上高津貝塚ふるさと歴史の広場 2004 『青と白への憧憬  
 ー施釉陶器がもたらされた場所ー』  
 山内伸浩 2008 『東濃地域における灰釉陶器・山茶碗生産の様相一窯の分布とその変遷からの視点』『日本考古学協会 2008 年度愛知大会研究発表資料集』日本考古学協会 2008 年度愛知大会実行委員会

### 多治見市文化財保護センター企画展パンフレット 「やきものの形 ～多治見の古代から中世～」

#### ●展示期間・場所

平成26年9月10日(水)～平成27年2月13日(金)  
多治見市文化財保護センター展示室

#### ●発行

多治見市教育委員会・文化財保護センター  
〒507-0071 岐阜県多治見市旭ヶ丘10-6-26  
TEL(0572)25-8633 FAX(0572)24-5033  
URL <http://www.city.tajimi.lg.jp/bunkazai/>

#### ●発行部数

600部(印刷費用16,020円)